
カンバセーション・ドローイングを連続的に 行うことの臨床的意義について

The Clinical Significance of Repeating Conversation Drawing

筒井 優介

関西大学臨床心理専門職大学院

Yusuke TSUTSUI

Graduate School of Professional Clinical Psychology, Kansai University

◆要約◆

カンバセーション・ドローイング（以下 Conv-D）とは、声を出さずに線や形などを一筆程度で交互に描き合うペアワークであり、フォーカシング指向アートセラピーのワークの一つである。Conv-D についてはセラピーで用いられることの意義やメリットが示唆されているが、筆者が調べた範囲では Conv-D を扱った研究は発表されていない。そこで本研究は、臨床導入に先立って Conv-D を連続的に行うことでどのような効果が期待できるのかを検討することを目的として、大学院生を対象に Conv-D を 2 回、連続的に実施した。各回の終了時に行ったシェアと 1 か月後の個別インタビューの内容について Thinking at the edge（以下 TAE）による解釈を行った。そして、TAE によって得られたパターンをもとにして Conv-D を連続的に行うことによる心的変化を体験過程理論を基に考察した。これによって、Conv-D を連続的に行うことで絵を描くという象徴化行為を通じた『気持ち』の変容、他者との相互作用による『気持ち』の変容、他者が象徴化することによる自身の『気持ち』の変容がみられた。今後、Conv-D の臨床的な効果が期待されよう。

キーワード：フォーカシング指向アートセラピー、表現アートセラピー、カンバセーション・ドローイング、TAE、体験過程理論

Abstract

Conversation Drawing (Conv-D) is a Focusing-Oriented Art Therapy exercise done in a pair where each take turns to draw lines and shapes alternatively without talking. The benefits and clinical significance of Conv-D has been suggested but insofar as the author examined, no research studies exist to date to demonstrate its effects. Therefore in this study Conv-D was carried out twice to graduate student for the purpose of considering what effects can be expected by repeating Conv-D. After each of the two sessions, sharing among the pair was recorded and an indi-

vidual interview was conducted and recorded approximately one month after the sessions. These recordings were interpreted using Thinking at the Edge (TAE). The patterns interpreted from TAE were then considered in light of the theory of Experiencing. Through such considerations, the changes in feelings observed were thought to be effects of symbolization, interaction, and symbolization by the other. Therapeutic effects of Conv-D can thus be expected and the author looks forward to future clinical research using Conv-D.

Key Words: Focusing – Oriented Art Therapy, Expressive Arts Therapy, Conversation Drawing, Thinking at the Edge (TAE), Theory of Experiencing

問題と目的

アートセラピー（芸術療法）という言葉は、イギリスで Hill, A. が結核患者などの慢性患者への生活療法の一環として絵画を扱った際に初めて用いられた。芸術療法が心理療法の一つとして確立したのはアメリカの Naunburg, M. の『力動的絵画療法』やスイスの Kalf, D. M. の『砂遊び療法』、イギリスの Winnicott, D. W. の相互スクイグル法によってである（山中, 1990；伊藤, 1992）。芸術療法（主に絵画療法）の主要な目的は作品を解釈することであり、山中（1990）は絵画療法の利点として、Freud, S. の精神分析の方法を用いる精神分析的方法や Jung, C. G. の分析心理学を用いる分析心理学的方法など7つの理論を用いて絵画を解釈したり理解したりすることを挙げている。この考え方の背景には、Jung, C. G. が描画を治療場面に導入して描画の治療的意味を悟ったことがある（Ellenberger, H., 1970）。このように作品の解釈を重視する分析的な立場が台頭する一方で、表現アートセラピー（表現療法と称されることが多い）が1970年代に確立した。表現アートセラピーは表現やそのプロセス自体を重視しており、Rogers, N.（ロジャーズ, 2000）や McNiff, S.（マクニフ, 2000）の活動によって広まった。また、Rappaport, L. は Rogers, N. に師事すると同時に Gendlin, E. T. にも師事し、表現アートセラピーとフォーカシングの影響を受け、両者を統合して『フォーカシング指向アートセラピー』（ラパポート, 2009；以下 FOAT）と名付

けた。

カンバセーション・ドローイング（以下 Conv-D）とは、声を出さずに線や形などを一筆程度で交互に描き合うペアワークであり、FOAT のワークの一つとしてラパポート（2009）が紹介した。池見・ラパポート・三宅（2012）によると、Conv-D の起源は定かではないが、相互スクイグル法に類似している。両者の相違点は、相互スクイグル法はリフレクションの手段として用いられるが、Conv-D はリフレクションだけでなく会話の相手も表現することができるという点である。また、池見、ラパポート、三宅（2012）は Conv-D を臨床現場で行うことのメリットや留意点、対象について言及しており、子どものセラピーで用いる意義にも触れている。しかし、日本において Conv-D を扱った研究はなく、学術情報検索データベースの CiNii (<http://ci.nii.ac.jp/>) で『カンバセーション・ドローイング』を検索しても該当する文献がない。そこで本研究では、臨床導入に先立って Conv-D を連続的に行うことでどのような効果が期待できるのかを検討することを目的とした。

方法

本研究は大学院の授業内で行った。対象者は14名（男性5名、女性9名）で、集団で実施した。なお、対象者は全員普段から同じ大学で授業を受けており、互いのことをよく知っている。用具としては無地の模造紙（788 × 1091mm）、色鉛筆、オイルパステル、マーカーペンを準備

した。

まず、アートに慣れる準備運動として様々な線を描くワークを20分間行った。実施方法は池見、ラパポート、三宅(2012, pp.35-36)で示されるように、直線、波線、ギザギザ、ループ、点線などを、鉛筆、オイルパステル、マーカーペンに持ち替えて描き、それぞれの描き味の違いや描いている時の感じに気づくよう教示した。その後、全体でシェアを行った。

次に、2人一組になってConv-Dのワーク1回目を実施した。実施時間は15分を目安とし、互いに終わられそうになったら終了するよう教示した。留意点として、言葉での会話をしないこと、笑いが出たら笑ってもよいことを伝えた。ワーク終了後にペアで振り返りを行った。振り返りの内容として、作品の感想、どのようなプロセスで進化したか、自分のパターンがどのようなものであったかの3点について話し合った。ここで言うパターンには、相手の描くものと類似したものを描く“相手に付いていくパターン”や、相手が描いたものに付け加える“相手中心で進めるパターン”、相手が意図した内容と反するものを描く“壊すパターン”、自分の持つテーマに沿って描く“自分中心のパターン”など様々なものがあるが、それぞれが自身でパターンに気づくことが重要である。その後、各ペアの作品を鑑賞する時間を設けた。そして、全体でシェアを行い、その内容をICレコーダーで録音した。

10分の休憩の後、ペアを変えずに2回目のConv-Dを実施した。実施前の教示として、1回目とは最初の一筆を入れる人を交代することと、「1回目のパターンを変えてもいいし変えなくてもよい」ことを伝えた。ワーク終了後に再びペアで振り返り、作品やプロセスの感想について自由に話し合った。最後に全体でシェアを行い、ICレコーダーで内容を録音した。

また、約1か月後に個別にインタビューを実施した。面接は①「ワークの1回目と2回目の違い」はどうだったか、Conv-Dによる②「相手の印象の変化」と③「相手との関係の変化」

はあったか、④「自分自身への気づき」があったかの4点について質問を行う半構造化面接を行い、会話内容をICレコーダーで録音した。

結果の分析はICレコーダーで録音したシェアと個別インタビューの会話内容を対象とした。解釈方法としてはThinking at the Edge (Gendlin & Hendricks, 2004, 以下TAE)を用いた。TAEはGendlin, E. T.がHendricks, M.と共同開発した理論構築モデルであり、「うまく言葉にできないけれども重要だと感じられる身体感覚を、言語シンボルと相互作用させながら精緻化し、新しい意味と言語表現を生み出していく系統だった方法」(得丸, 2010)である。この手法を用いた目的として、Conv-Dと同様にTAEもフォーカシングの理論から派生したものであること、「身体的な暗黙知を言語化し、構造化する」(鈴木、得丸, 2008)というTAEの特性を生かすことで臨床応用への手掛かりを見出す可能性を広げることが挙げられる。TAEは「フェルトセンスから語る」(ステップ1~5)、「側面(具体例)からパターンを引き出す」(ステップ6~8)、「理論形成」(ステップ10~14)という3部・14ステップに分かれている。本研究ではConv-Dを通じてどのような「パターン」が生じ得るかを把握するため、ステップ6~8、及び9を実施した。なお、「パターン」とは「さまざまな物、事、人に当てはめることができる何かと何かの関係を表す一般的な表現形式」(得丸, 2010)であり、「側面」が示すところの意味を一般的な表現で言い表したものである。また、TAEのステップ9「自由に書く」では、ステップ8までで気づいたことをメモする作業を行う。得丸(2010)はこのステップ9を「ここまでで得た気づきが、書くことにより、おのずとまとまっていく段階」と位置付けている。

結果

まずステップ6「側面(具体例)を集める」で

表1 抽出したパターン

パターン	パターン
①「ワークの1回目と2回目の違い」	②「相手の印象の変化」
1回目	変化はなかった 相手のパターンが理解できた 相手の新しい側面に気付いた 相手に自分と似た側面を感じた 相手について気づいていた側面を再確認した 相手のことを分かっていることが分かった 自分と似ている相手には親しみを感じる
相手の出方をうかがう 相手に合わせる 相手に気を遣う 相手の出方をうかがうあまりに楽しめない 相手に気を遣いすぎて疲れる 相手の伝えようとしていることが理解できない 初めての環境には慣れない ルールや規範にとらわれて楽しめない 温かい雰囲気や関係性ができた よく知った相手なのに、この場面では初対面の人と取り組んでいるような感覚がある	③「相手との関係の変化」
2回目	実際に関係が変わることはなかった 相手を前にしたときの、自分の気持ちの変化があった 相手の新しい側面を、日常でもいつか出してくれるだろうと予感する 共同作業を通じて、信頼関係が深まった 相手のことが理解できたので話しかけやすくなった 相手と話しているときに、共同作業した時のことを思い浮かべる 分からない相手についての興味が湧いた 一緒にいても居心地が悪くない 一度受け入れてもらえると、次も受け入れてくれる気がする 一度失敗したら、次は同じことをしないよう心掛ける 相手が笑ってくれると嬉しくなる
二人で一緒だと感じてあたたかくなる 意思の疎通ができた 場面に慣れると余裕ができる 相手の意図を考える やり取りを楽しむことができる 達成感を感じる事ができた 1回目とはパターンを変えてみる 1回目で感覚が分かったためやりやすい 迷いや怖さがなくなり、思い通りにできる 豊かに表現できるようになる ルールや規範にとらわれないで楽しむ 何も準備せずに、目の前のやり取りを楽しむ 共同作業を通して一体感を感じる	④「自分自身への気づき」
1回目と2回目を通じて	発見があった 大きな発見はなかった 自分のパターンが理解できた 自分の一側面に気づいた 相手との関係によって変化した 気づきが意図せず自然と出てきた 発見した自分の側面が日常でも出るようになった 発見したことを日常でも考えるようになった 自分の一側面を再確認した 振り返ってみることで気づくことがある 気づいたことについて、今まではどうだったのか振り返る 環境が変わると性格も変わる 自分の変化を「面白い」と感じる 作品に自分の性格が出る
合わせてもらうばかりでは面白くない 相手と通じ合っていないと不安になる 自信がないことから逃げたくなる 相手のペースに合わせて行った 壊す、相手の意図しないことをする 相手の行動の意図を考える	

は、個別インタビューにおける対象者それぞれの語りから側面を集めた。次にステップ7「各側面（具体例）が詳細な構造を与えるようにする」では、それぞれの側面からパターンを抽出した。そしてステップ8「各側面（具体例）を交差させる」では、ステップ7で抽出したパターンを相互に「交差」させ、新たに浮かび上がってくるパターンを抽出した。「交差」とは、「ある体験から見出した形式を取り出し、別の体験に当てはめて感じてみること」（得丸，2010）である。ステップ7～8によって抽出したパターンを表1に示す。なお、ステップ9で得られたことは考察で論じる。

考察

ここではまず、ステップ9によって得られた理解をもとに、Conv-Dを連続的に行うことでどのような心的変化が起こりうるのかを検討する。これを踏まえて、心的変化を体験過程理論から捉え直すことでConv-Dを臨床導入するにあたってどのような効果が見込めるかを考察したい。なお、対象者の発言を〈 〉、パターン名を【 】で示す。

1. Conv-Dで起こる心的変化

まず、①「ワークの1回目と2回目の違い」に着目する。1回目では【相手の出方をうかがう】、【相手に合わせる】、【相手に気を遣う】というように、相手を意識する気持ちが強くなる。その結果、【相手の出方をうかがうあまりに楽しめない】、【相手に気を遣いすぎて疲れる】といったことを感じる。また、初めての環境に慣れることを要したために、【ルールや規範にとらわれて楽しめない】であったり【よく知った相手なのに、この場面では初対面の人と取り組んでいるような感覚がある】といったことを感じた。そうした不自由さを感じながらも、ワークを通じて【温かい雰囲気や関係性ができた】と感じることができたようである。1回目でこうした

雰囲気や関係性ができたことによって、2回目では【1回目で感覚が分かったためやりやすい】と感じることができた。そうしたやりやすさは、【場面に慣れると余裕ができる】や【迷いや怖さがなくなり、思い通りにできる】といった意識の変容につながり、【相手の意図を考える】、【1回目とはパターンを変えてみる】、【何も準備せずに、目の前のやり取りを楽しむ】といったチャレンジをしたり、【やり取りを楽しむことができる】、【表現が豊かになる】、【ルールや規範にとらわれないで楽しむ】など作業に集中することができたりといったように、作業の質も変わる。それによって、ワークを通じて【二人で一緒だと感じてあたたかくなる】や【意思の疎通ができた】、【達成感を感じる】、【達成感を感じることができた】という体験をすることができた。ここで述べた心的変化の過程を図1に示す。

②「相手の印象の変化」では、【変化はなかった】と感じる対象者もいたが、Conv-Dを通じて【相手のパターンが理解できた】と感じたり、【相手について気づいていた側面を再確認した】という作業を行ったりすることができた。また、【相手の新しい側面に気づいた】対象者や、【相手に自分と似た側面を感じた】対象者もいた。

③「相手との関係の変化」では、【相手のことが理解できたので話しかけやすくなった】という変化があった対象者は少数で、【実際に関係が変わることはなかった】と回答する対象者が大半であった。このことは、普段から同じ大学で授業を受けているため当然であると言える。しかし、そのようにお互いのことを知っている集団においても、【共同作業を通じて信頼関係が深まった】ことで【相手を前にしたときの、自分の気持ちの変化があった】という内的な変化が見られた。このような変化によって、【一度受け入れてもらえると、次も受け入れてくれる気がする】や【一緒にいても居心地が悪くない】と感じるようになったり、【相手の新しい側面を、日常でもいつか出してくれるだろうと予感する】気持ちが生まれやすくなった。

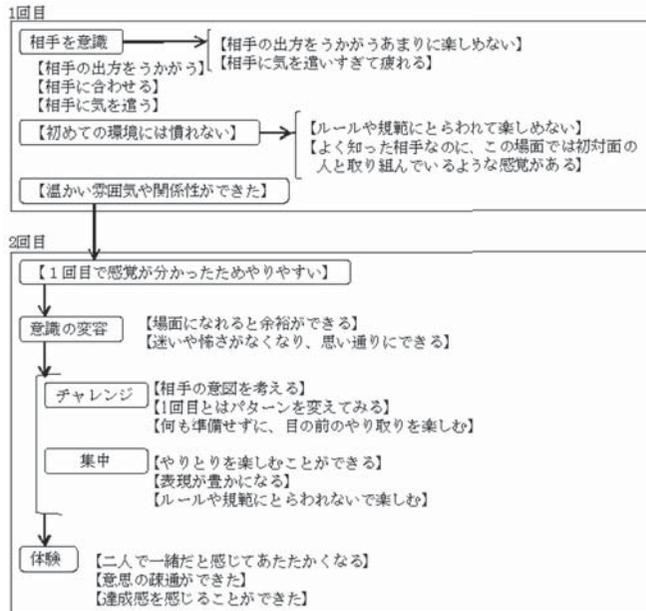


図1 Conv-Dにおける心的変化の過程

④「自分自身への気づき」では、大半の対象者に【発見があった】。それは【自分の一側面を再確認した】、【自分のパターンが理解できた】といった確認作業としての発見から、【自分の一側面に気づいた】や【気づきが意図せず自然と出てきた】といった新たな側面の発見まで様々であった。中には【相手との関係によって変化した】と感じた対象者もいた。対象者Aはワーク中に自分の側面が〈(ペアの)Bさんと私だったから出てきたものなんだろうな〉と語っている。対象者Cは以前にもConv-Dを体験したことがあるが、〈置かれている状況とか一緒にいる人で、左右されるといふかそういうものに影響されやすい自分〉に今回気づいた。さらに、自分の側面が【発見した側面が日常でも出るようになった】対象者や【発見したことを日常でも考えるようになった】対象者もあり、日常生活への変化にもつながった。

ここまでの過程が事例からも観察できるよう、あるペアの実際の作品を図2～3に示し、シェアの発言内容の記録を付録に示す。

2. 体験過程理論から捉えた心的変化

本研究から、Conv-Dを連続的に行うことで以上のような心的変化が生じることが示唆された。ここで、本研究で見られた心的変化について体験過程理論から捉え直す。

まず、象徴について考察する。池見(2011)はフォーカシングの実演を考察しており、その中で体験と象徴について「体験は象徴を通して言い表されるが、象徴によって体験が再び呼び起こされ、体験が変化し、別の象徴によって言い表されてくる」(p.5)と説明している。フォーカシングにおいては言語象徴が行われるが、Conv-Dにおいては絵を描くという象徴化する行為が行われる。そして、自身が描いたものを見ることで体験が変化していく。こうしたプロセスを通して『気持ち』が変化していく。対象者Dはワークの中で花を描きたいと思い始め、それに葉っぱを付け足す、赤ちゃんを描く、シャボン玉を描くというプロセスを経て、描き終わった感想として自分や周りに〈優しくいたんだな〉ということに気づいた。移り変わる自分の様を振り返って見る視点が、この例から観

察された。

次に、相互作用という観点から考察する。ラバポート（池見、ラバポート、三宅、2012）は日常の様々なことが相互作用の内に起こっていること、Conv-Dではまさにそれを実感することができることを述べている。また、相互作用は『気持ち』の変化、体験過程理論における推進（*carrying forward*）あるいは一歩（*step*）をもたらす。ジェンドリン、池見（1999）はこれを「一歩は相互作用のプロセスにおいて生じる」（p.46）と説明している。前述した対象者Aの語りはまさにこのことを示している。

最後に、他者が象徴化することによって自分の『気持ち』が変化することについて考察する。Ikemi（2013）は人間的な営みにおいて主要なプロセスとして、体験の暗在的（*implicit*）な側面を言い表す（*explicit*）ことを取り上げている。Conv-Dにおいて「言い表す」は「描き表す」と言い換えることができよう。Conv-Dでは最初にどちらかが描き表し、後に描き表す者はそれを見た感じを象徴化して描き表す、それをまた先に描き表した者が見て象徴化して描き表すといったやり取りを継続して行っていく。一方が象徴することで一方の体験に含意された暗在的に感じているものが相手の体験にも含意され、相手は暗在的なものを感じてそれを表現する。このことは、言語を用いた場面において聴き手が感じられたことを話し手に伝えるかかわりと同じ作用が起こっていると言える。このとき二者は「交差」（*crossing*）していると言え（Ikemi, 2013）、交差によって一方の暗在的なものへの理解が進み、『気持ち』が変化していく。

今後の課題

本研究によって、Conv-Dを連続的に行うことで絵を描くという象徴化行為を通した『気持ち』の変容、他者との相互作用による『気持ち』の変容、他者が象徴化することによる自分の『気持ち』の変容がみられ、治療的な効果が期待で

きるという臨床的意義があることが示唆された。Conv-Dを取り扱ったセラピーの実践例は、冒頭で述べたとおり未だ報告されていない。Conv-Dをセラピーに用いた際にも同様のことが起こり得るのかを検証するためにも、多くの臨床報告がなされるよう今後期待したい。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、本研究について様々なご示唆をいただきました関西大学臨床心理専門職大学院池見プラクティカルの皆様、そしてご指導とご助言を賜りました関西大学臨床心理専門職大学院池見陽教授に御礼申し上げます。また、研究に参加していただいた関西大学臨床心理専門職大学院の皆様にも御礼申し上げます。

文献

- エレンベルガー、H. (1980)：『無意識の発見』 弘文堂
Ellenberger, H., *The Discovery of The Unconscious*.
New York, Basic Books, 1970.
- Gendlin, E. T. & Hendricks, M. (2004)： *Thinking at the edge steps*. The Folio 9(1)：12-24.
- ジェンドリン、E. T.、池見陽（1999）：『セラピープロセスの小さな一歩』 金剛出版。
- 池見陽（2011）：「フォーカシング」にみるユージン・ジェンドリンの現象学 『フッソール研究』9：1-14.
- Ikemi, A. (2013)：他者への反省以前の架け橋を言い表す：僕が生き進むことを君は促してくれるのか 筒井優介、橋場優子、宮本一平訳、池見陽監修『関西大学 臨床心理専門職大学院 紀要』3：11-20.
- 池見陽、ラバポート、L.、三宅麻紀（2012）：『アート表現のこころ』 誠信書房.
- 伊藤俊樹（1992）：芸術療法 氏原寛、亀口憲治、成田善弘、東山紘久、山中康弘（編）『臨床心理大事典』 培風館 pp.391-396.
- マクニフ、S. (2010)：『芸術と心理療法』 誠信書房
McNiff, S., *The Arts and Psychotherapy*. Springfield, Charles C. Thomas Publisher, 1981.
- ラバポート、L. (2009)：『フォーカシング指向アートセラピー』 誠信書房 Rappaport, L., *Focusing-Oriented Art Therapy*. London, Jessica Kingsley Publisher, 2009.
- ロジャーズ、N. (2000)：『表現アートセラピー』 誠信書房 Rogers, N., *The Creative Connection: Expressive Arts As Healing*. Palo Alto, Science & Behavior Books, 1997.
- 鈴木寿子、得丸さと子（2008）：作文添削活動の実践研究における添削者の学び 言語文化と日本語教育 36：

11-20

得丸さと子 (2010) : 『ステップ式質的研究法』 海鳴社
 山中康弘 (1990) : 芸術・表現療法 前田重治 (編) 『心理療法 2 (臨床心理学体系 8)』 金子書房 pp.112-134

付録 対象者 E と対象者 F のシェアの発言内容

【1 回目終了後】

E : なんか付かず離れず作っていったなあという感じで、あの… F さんとだったので、私がおっこんで、付いてきてもらっちゃうことになるのかなって思ってたんですけど、お互いぶっこみつ、寄り添いつつみたいな良い感じの距離感でやっていって、でなんかちょっと上手く説明はできないんですけど、あるものを描いた時に「F さん分かってる！」って思って(笑う)、「あなた分かってるねえ！」って思って、そこからちょっと一気に楽しくなって、いや目とかも合わせてないです、一切会話とかもしてないですけどなんか気持ち良く描けていって、で…なんか、そうですね、お互いの線を生かされたかなあとと思います、はい。

F : そうですね、まあ E さんから言ってもらった通り、こうぶっこみつつの配慮っていう所が終始こうあったかなあとって、まあ、結構大胆なこともやりつつ、ただお互いの、こともまあ見てる、みたいな所で良い距離感だったんじゃないかなあと、私も思いました。で私は個人的にはその自分が「あ、ちょっとこれやりすぎたかな」とか、「これはちょっと違ったかな」と思ってた所とかもあったんですけど、それを終わった後に、まあ聞いてみたら意外とそこは全然そんな風ではなかったとか、自分が思ってることと、まあ相手の、その感じ方みたいな所の違いみたいな所が分かって、それは面白いなあと思って、はい、やらせてもらいました。私もなんか、全体としてこう、良い感じにまとまったんじゃないかなあと、思ってます、はい。

E : すいません、最後になんですけど、私たちこう対面で描いたんですけど、絵に向きがあるって話があったのでこの絵の向きはどこかなあって思ったんですけど、お互いこう向き合って描いたけど、こっち (E) 向きでもこっち (F) 向きでもなくて、私たちの作品ここ (写真右下) が正面、斜めだっということが分かって、どっちも自分目線で描いてなかったみたいな (笑う)、面白いなあと思いました。

【2 回目終了後】

E : 2 回目はなんだかこう連帯感があって、私が思うに、1 回目は探り探り、「え、何描く？何描く？」みたいな、ちょっと「合わせる？合わせる？」みたいな感

じでやってたんですけど、2 回目は、お互いが何かお互いのベースで、あ、何か肩を並べて歩いてる感じとか、探るって言うよりも二人で一緒に歩きたいな感じで作って行って、最初は多分静物画っぽいイメージでお互い描いてて、私ははっきり分かって合ってると思ってたんですけど、最後こう共有すると、私は最初静物画っぽいイメージから四季を表してるのかなあとって、こっち側が春夏っぽい感じで、こっちが秋冬っぽい感じでとか、なんか向きを、壺っぽいものを描いてくれたので、向きを与えられちゃったからちょっと抵抗で、水を垂れ流してみたりして「重力はこっちだよ」みたいな、ちょっと抵抗したりとかしながら描いてたんですけど、終わって共有すると、全然そんな意味で描いてたわけじゃなかったことが分かって、でもなんか何となく一つの絵が出来上がって何か不思議で面白いなあと思いました。

F : そうですね私もなんか静物画だと思って始めたけれども、最後はなんだったんだろうとは思ってるんですが、ただ何か E さんが今話してくれたみたいに、まあ 1 回目は割とこうお互い様子を見ながらやった感じがあったんですけど、今回もう一回り大きなスケールというか、自分の勢いもお互い保ったままやっていく中で、こう良い形でお互いこう、励まし合いながらっていうのも変なんですけど、良い意味でこう相乗効果で、何か出来たのかなあっていう感じがすごいしてます、はい。

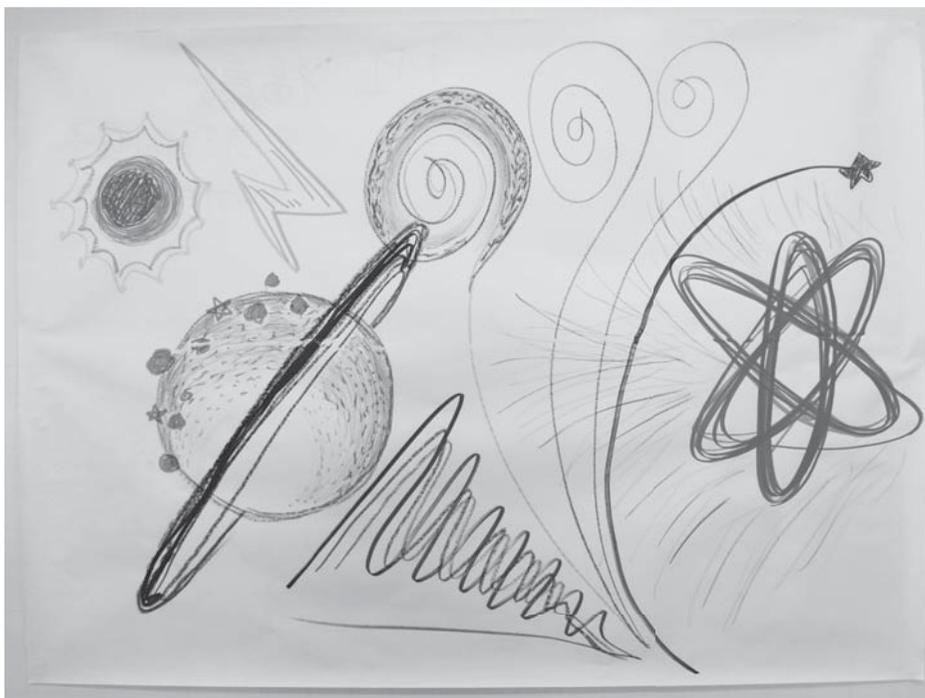


図2 対象者Eと対象者FのConv-D（1回目）



図3 対象者Eと対象者FのConv-D（2回目）